

木酢液で松枯れ防止

木質バイオマス発電 副産物活用

産業化、里山保全図る

宝達志水町で木質バイオマス発電所を運営する「いしかわグリーンパワー」などは6日までに、発電時に生成される木酢液を活用した松枯れ対策に乗り出した。木酢液は、殺虫効果があるとされ、松枯れ被害が広がる能登地区のゴルフ場で試験を開始する。同発電所で1日最大40キログラムが大量生成される副産物を有効利用し、産業化と里山保全の面でも「一石二鳥」を目指す。

木酢液は樹木を炭化する際に抽出される弱酸性の液体。効能は広く知られるが、家庭のガーデニングなど、小規模な範囲で使われることが多い。2008（平成20）年5月

域で確認され、08年度で5466立方メートルに上った。兼六園や能登有料道沿いでも被害が深刻化している。

試験は、県立大の長谷川和久客員名誉教授が担当し、いしかわグリーンパワーとコンサルタント会社のカトラス（金沢市）、炭化装置を製造し木酢液抽出技術を持つ明和工業

（同）が連携する。志賀町の能登ゴルフ倶楽部が協力し、11月から約6カ月間、希釈度が違つる種類の木酢液を散布して観察する。県立大の実験農場で野菜栽培への効能も確認する。同社は今後、新たな破碎選別プラントを導入し、木材の受け入れ量を倍増させる計画で発電や木酢液の生産を強化する。いしかわグリーンパワーの鈴木誠社長は「副産物である木酢液を活用することで、バイオマスの可能性を広げ、里山の新たな産業を創出したい」と期待している。

いしかわグリーンパワーなど試験



発電施設内でガス化炉に運ばれる木材チップ
—昨年5月、宝達志水町針山



立ち枯れ被害が広がる松林
—2005年、白山市内



バイオマス発電
間伐材や製材所から出る木くずなどを燃料とし、蒸気でタービンを回して発電する。市場価値のない木材廃棄物の再利用や間伐による森林活性化で二酸化炭素の削減につながるなどメリットが多い。

